

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第54回 在宅医療のゆくえ

本紙にも掲載されていた「第14回在宅医療推進フォーラム」のこのパネルが、来る11月23日、東京ビックサイト国際会議場で開かれる。勇美記念財団主催の行事で毎年開催されているが、参加者は大半が医療者で本気

在宅で過ごす意味 芝居で問う

在宅に取り組んでいる先生方。私自身がん患者として4年連続で参加しているが、私にとって大切な学びの場である。特に市長、区長、町長と医師会長が登壇して、全国から集まって来る1000名を超える参加者の前で地元の在宅医療の推進に関する話をする勇氣は称賛に値する。この企画は数年前から継続していて、毎年新しい地域のトップが現れる。

劇団「ザイタク」による「お一人様でも、自分の家でピンピンコロリできるんで!」のDVD上映会も興味深い。関西地区の医師たちが演じる。通常上映時間90分だが、今回は短縮版26分を使うらしい。プロデュースは尼崎の長尾先生。在宅で過ごす意味とノウハウを教えてくれる。このDVDをがんサロンメンバー、行政担当、病院担当と全員で見たことがあったという声を聞いた。今後開催予定の地元講演会でも上映を予定している。

県主催のある会合で登壇を行政に依頼したこともあったが、全く取り合ってもらえなかった。勇美記念財団からは数回助成金も頂き、地元益田市へ沢山の先生方をお呼びして「在宅医療」について講演会を開催して啓発を行ってきたが、一向に成果が上がっていない。

3年前、夕張市崩壊後、診療所を運営していた森田先生をお呼びした。当地も夕張市の二の舞にならないようにと思い、話しをして頂いたが大失敗。地元「在宅医療」への意識の低さを痛感した。

自分たちが安心して、慣れた地域で暮らすにはどうすればいいかを、もっと真剣に考えなければ将来は危ない。他人事として捉えず、自分自身・家族のこととして地域医療・看護・介護の面からしっかりと考えるべきだろう。そうでなければ死ぬに死ねない。地元を憂うる気持ちをいつまでも持ち続けている。